

お茶の時間

中国のネット上の隠語

編集委員長

中国で強権的なネット検索が行われ、政権批判などが削除されていることはよく知られている。この当局の目を掻い潜るために、ユーザーは隠語を使って政権批判まではいかなくとも、政権を揶揄することで留飲を下げている。

2月末に、習近平政権が打ち出した国家主席の任期（2期10年）を撤廃するための憲法改正案に対して、インターネットで「北朝鮮と五十歩百歩だ」「生涯で最も悲しい日だ」「いっそのこと世襲制に変更したら」などの批判が相次いだ。中国当局は、ネット上に大規模な監視網を構成して、今回の憲法改正案に対する政権批判の書き込みを片っ端から削除している。これに対してネット利用者は、直接的表現を避けて隠語で書き込みを続けている。

この隠語を紹介してみよう。

当初、使われたのが「袁世凱」である。袁世凱は20世紀初頭中華民国の大統領の座に就いた。彼は就任後、その任期を事実上撤廃し、皇帝制を復活させた。次に使用されたのが、今回の憲法改正案が時代の逆行だというために

「バック走行」を意味する「開倒車」という言葉である。使われ方は「バック走行中です。ご注意を」などである。ただ、どちらも相次いで禁止用語となり、ネット上から消えていった。

最近よく使われているのが「歴史の目撃者」である。今回の憲法改正案が毛沢東による個人独裁の反省から最高権力者の任期に制限を設けたという中国共産党の歴史を覆すとの意味を意識している。使われ方は「大中華帝国の偉大な復興だ。我々は歴史の目撃者だ」などと当てこすっている。

もう一つは、先の「袁世凱」から波及した皇帝の英訳「Emperor」で、「またEmperor がやって来たよ」である。「ママは習さんの任期中に結婚しろとせつについて、うるさいが、これでホッとできる」というのもある。

政府は、マスコミで「国家主席の終身制復活を意味するものではない」との解釈を掲載しているが、批判は収まる様子は見えない。これからも当局の削除に対抗して、あの手この手で隠語を使い続けるのだろうか。

腐敗官僚を打倒する汚職摘発運動によって、庶民の支持を広げた習近平政権にとっては、庶民のネットを使った反発は誤算とも言えそうで、対応に手を焼いているようだ。